



# ターニング・ポイント

*Turning Point*

ジリアン・O デボラ・エドワーズ 作

前橋梨乃 訳

「すてき！」

自分の私書箱を開け、ダニエルはそう思った。

「届いてる！」

そこに入っていた小さな黄色のカードをとると、受付窓口に急ぐ。このカードで受け取れる小包には、まちがいはなく「E-B a y」に注文していたワンピースが入っているはずだ。

ダニエルは、窓口にいた他の二人の客の後ろに並び、待ちきれず足踏みさえした。

やっと順番が来て、背の低いがっしりした中年の郵便局員にカードを手渡すと、彼はカードをたしかめ、奥に向かった。

なに、のんびりしてるんだ？ 小包ひとつ探すのが、そんなにむずかしいの？

と、郵便局員はゆっくりと歩いてきて、小包を差し出した。

ダニエルは、それを受け取りながら、思わず熱いまなざしを送っていた。

しかし、郵便局員が次に言った言葉は、ダニエルのそんな興奮を、すぐに冷ますことになった。

「他になにがあるのかね、坊や？」

ダニエルは礼儀正しく「いえ。ありがとう」と言うと、その場を去った。

郵便局員の言葉はダニエルの抱える問題を、まさしく言い表していた。

新しいドレスを手に入れ興奮しているダニエルは女だった。でも、世間の目には、今のところ男にしか見えないのだ。

ダニエル——ダニーは、そんな事実を認識して以来ずっと不幸だった。

自分が美しい女性以外のものになり

たいなんて思ったことはない。そんな自分の願望にいくら抗ってみても、けっきょくいつも、その願望にたどり着くのだ。

現在24歳、そして、この小さな南部の町で表面上はとりすまして暮らしている。

でも、今では、そんな願望は叶わないだろうとあきらめ始めてもいた。問題はいくつもある。お金のこと、どうやって医者を探すか、どうやって生活を変えるのか？

そんなことはできるはずもない。しようと思っただけではいけないのかもしれない。

「いいえ！」

ダニエルは思った。

「あんな郵便局員なんかに、あたしの人生を否定されてたまるもんですか」

そう考えながら、1988年型のサターンに乗り込むと、家路を急いだ。

この車もそろそろ買い替えないといけない。でも、そんなお金は人生を変えるための貯金にまわしたい。それに、部屋代だって貯めておかなければならないのだ。

ダニエルは、感じのいい年配夫婦の家に間借りしていた。すてきな2階建て注文住宅の地下ガレージを改造した部屋だった。

その、カイルとサラのヘンソン夫妻は、50代の終わりに家を建てたという。カイルは証券業で成功したあと引退したらしい。65歳という年齢だが、健康そのもの。毎日ジョギングし、週何度かヘルスクラブに通っている。サラは慎み深い専業主婦だ。彼女の美しさは、年齢も感じさせない。とても上品で感じよく、愛らしいその顔は、彼女の心

のきれいさが現れたものにちがいない。

その家の駐車場へと乗り入れた頃には、ダニエルはまた、さっきの興奮状態に戻っていた。

庭の花の手入れをしていたサラがこちらに気づき「お帰り、ダニー」と、満面の笑顔で声をかけてきた。

「アイステイーを飲みに来ない？」

「あっ、いえ、またあとでうかがいます」

ダニエルも笑顔を返しながら、そう言った。

「ちょっと、することがあって」

ダニエルの部屋には二つの入口がある。ひとつは母屋同様、外から入るドア、そしてもうひとつは、母屋のキッチンに通じるドアだ。

ダニエルは急いで外のドアを開け、中に入ると、その小包をソファベッドの上に放り出した。

留守電とメールのチェックをすませたあと、そのソファベッドまで来ると、ダニエルは包みを開けた。

そこから出てきた新品の服は、素晴らしいものだった。宣伝で見たのと寸分違わない完璧さだ。

アリソン・グレイのライトブルーの光沢あるワンピース。半袖で、胸の部分を適当に隠しながらも、フェミニンに見えるようにデザインされていた。

ダニエルにはぴったりのサイズ8だから、40インチの裾丈は、ちょうど腿のあたりに来るだろう。

ダニエルは、この服に似合う理想的な靴——3インチのヒールのパンプス——を持っていた。

青っぽいシームの入ったグレイのス

トッキングが、そのドレスと靴をさらに美しく引き立てるはずだ。

このクラシックで光沢あるセクシーなルックスは、男の目も女の間目も引くにちがいない。ミディの裾から時たまいたずらっぽくのぞく、ストッキングを引っ張るレーシーなガーターストラップは、さらに視線を集めそうだ！

ダニエルは手早く服を脱いで、髪を下ろした。

すでに性転換を決めているダニエルは、髪を伸ばしていた。今はもう、肩の下あたりまで達している。先のぼらつきや枝毛処理のため、一度切りそろえた。だから、輝くブロンドヘアがワンレングスになっている。

ダニエルは、それを、手櫛で真っ直ぐに揃えた。

職場の上司は、ダニーが髪を伸ばし



ていることをよく思っていない。

でも、一日中、電話応答だけしている顧客サービスの部署なんだから、問題ないだろう。

そう考え、ダニエルは工作中、今や男でもおかしくはない、きちんとしたポニーテールにしている。

ダニエルはドレッサーを開け、白のプッシュアップブラを取り出すと、それを身につけた。今のところまだ、ブラにはブレストフォームを入れなければならない。ダニエルは、早くこんなもの使わなくてもすむようになればいいのにと考えた。

次に、すてきな青いサテンパンティを着ける。肌に触れるサテンの感触は、本当に気持ちがいい。

それから、ウエストにくびれをつくるシンチャーをとめる。その新しいド

レスをとりあげると、頭からかぶり、体の線に沿って降ろしていった。すべすべした肌に触れるその生地は、ダニエルを夢中にさせた。ほとんどの体毛はすでにレーザー脱毛していたし、髭も電気分解している最中だ。

ダニエルは、夢の実現のため、少しずつできることをしてきた。でも、ゴールはまだ、ずっと先だった。

次に、机の小さな丸鏡の前に座る。

そして、ファンデーションを塗り始めた。

ベースメイクがすむと、アイメイクにかかる。ナチュラルなブルーを感じさせる色を選ぶことが大事だ。それは、あのドレスを引き立てるはずだった。

慎重にアイライナーを引いた後、まつげをカールする。ナチュラルなぱっちりした目をつくるためには、微妙な

アイシャドーのタッチが必要だった。

ボリュームある唇をつくるために、ダニエルはダークレッドの口紅とリップライナーを使った。

そして最後に、小さいフェイクダイヤのイヤリングとお揃いのネックレスをつけた。

それから、ダニエルは髪をといた。いつか美容院に行って、フェミニンなヘアスタイルを注文する日を夢見ながら。それは、パーマなのか、くるりんとした巻き毛なのか……いや、そんなことは重要じゃない。より女性らしく見えるカットなら、それで満足だ。

すべてが完了したときには、すでに8時30分をまわっていた。

ダニエルはまだ夕食をとっていなかった。食べるのを忘れるほど興奮して

いたのだ。

ダニエルは靴を履き、バスルームの姿見の前まで行った。鏡に向き直ると、その出来は満足のいくものだった。そこには、ダニエルが日頃から望み、いつの日か完成するはずの姿がかいま見える気がする。

この姿を、誰でもいいから他の人間に見てもらいたいという思いが、切実にわき上がった。だが、ダニエルはこれまで一度も、他人に自分の夢や本心をあかしたことはなかった。

いつかきっと現れるはずの、同じ心情を持った理解者を待つしかなかった。

ダニエルがそんなことを思っている時だった。なにかが崩れるような大きな音と、女性の叫び声がした！

サラだ。サラにちがいない。

ダニエルは、ヒールが許すかぎりの速さでドアに向かって走っていた。

キッチンに飛び込むと、ひっくり返った台のそばにサラが倒れているのが見えた。サラは、左腕をつかんで、痛そうにうめいている。

駆け寄って腰を下ろしたダニエルは、膝の上に彼女の頭をのせた。

「サラ、だいじょうぶ？ けがはない？ なにが起きたの？」

ダニエルはパニックに陥っている彼女に向かってきいていた。

「だいじょうぶ、だいじょうぶよ」

サラは言った。

「一番上の棚の食器をとろうとしたら、のってた台がひっくりかえったの」

「腕、痛むの？」

ダニエルがさらにきくと、サラが答える前に、タオルにくるまり水を滴らせながらカイルが階段を駆け下りてき

た。どうやら、サラが落ちた時、シャワーを浴びていたようだ。

ダニエルにとって、カイルの裸体を見たのはこれが初めてだ。その体は、65歳の男とは思えないスポーツ体型だった。

でも、ダニエルは、すぐにサラのことに気持ちが向いた。

「そこの台から落ちたみたいなんです」

ダニエルは、カイルにそう叫んでいた。

「おい、だいじょぶか」

カイルがサラに声をかけた。

「え、ええ、平気よ」

サラはカイルを安心させるようにそう答えた。

「いえ、そんなことはないです」

ダニエルは声をあげていた。

「サラは腕を痛めています。医者に診てもらった方がいい」

カイルとサラが、ダニエルに気づいたのはその時だった。ダニエルのこんな姿を見たのは、彼らにとってももちろん初めてだ。その驚いた顔が、すべてを物語っていた。

ダニエルは、二人から目をそらし、赤面した。

いきなりこんな格好を見られ、そのあとおこることに直面しなければならなくなったのだ。

と、カイルが口ごもりながら言った。「か、彼……彼女の、言うとおりでよ。医者に行った方がいい。急いで着替えてくるよ。救急病院に行こう」

カイルは、そう言いながら二階に戻った。

「さあ、椅子に座って待ってましょう」

ダニエルはサラを助け起こしながら言った。

「氷で冷やした方がいいですね」

サラをキッチンチェアに座らせたダニエルは、冷凍庫を開け氷を出すと、調理台にあったきれいに洗濯したふきんで包んだ。

「どうもありがとう」

サラは、どこかくすくす笑うような声でそう言ったあと、こうつぶけた。

「それは、お出かけのためのおめかしなの？」

「い、いえ、その、つまり……。説明するのはむずかしいんですが……」

「ふふ、なにも言わなくてもいいのよ」

サラは、ダニエルの気持ちを落ち着かせるような声でそう言った。

「とってもかわいいわよ。それ、新しいドレス？」

「サラらしい言い方だな」と思ったダニエルは「え、ええ」と答えながら、そんな答えではなにもならないなと思った。



「僕がどうしてこんな服を着ているのか、知りたいですよね」

と、そこへカイルが戻ってきて、サラに近づいた。

「少しは落ち着いたみたいだね」

カイルは、気づかう口調で言った。

「ほんとに、医者になんて、行かなくてもだいじょうぶよ」

「だめだ」

カイルは、今度は厳しい口調でつぶけた。

「もし、骨でも折れてたらたいへんだろ」

そのあと、ダニエルの方に向き直り、助けを求めるように「彼女を車に乗せるのを手伝ってくれるかい？」ときいてきた。

「もちろん」

ダニエルは答えながら、思わず微笑んでいた。

永年いっしょに暮らしてきて、まだこんなお互いへの思いやりを示せる二人がすてきだと思ったのだ。

サラが車に乗るのを助け、二人を見送ったあと、ダニエルは自分の部屋に戻った。

ソファベッドの端に体を落ち着け、しかし、その手は顔を覆っていた。ダニエルは泣いていたのだ。

カイルとサラは、僕に出て行けというかもしれない。

サラは、腕のケガ以上にショックを受けたのかもしれない。

あたしのやって来たいろんなことは、時間の浪費に過ぎない無意味なことだったのかもしれない。

\*\*\*

カイルとサラが病院から戻ってきたのは、11時近くだった。

ダニエルは、すでにスエットパンツとTシャツに着替えていた。メイクも洗い落とし、髪もポニーテールに戻っていた。

ダニエルは、サラがどんな具合なのか、見に行きたいと思った。彼女自身のためにも、そうする方がいいと思った。もしなにか手助けできることがあるなら、そうしたいとも感じた。

でも、今、カイルとサラはあたしのことをどう思っているだろう？

彼らは、あたしの存在を嫌っているんじゃないか？

話をするのさえ嫌なんじゃないか？

ドアの前に立って、そんなことを迷っている時、その疑問に対する答えが、ノックという形で返ってきた。

ドアを開けると、そこには、包帯で

腕を吊ったサラが立っていた。

「どうぞ、入って。ひどいけがじゃなかったですか？」

ダニエルが尋ねると、サラは、きわめて穏やかに答えた。

「ええ、だいじょうぶ。ちょっと肘をねんざしただけですって。何日かしたら完治するって、お医者さんは言ってたわ」

「ほんとによかった」

ダニエルはうれしそうに言った。

「そこの床に倒れてるのを見た時は、もっとひどいと思いましたから」

「心配することないわ。ほかつといても治るみたいだから、それ以上言わなくても大丈夫よ」

サラはそう言ってから、つづけた。

「だけど、私たち、話す必要があるみたいね」

「座ってください」と言いながら、ダ

ニエルは、これから起こることを悟っていた。つまり、この部屋を出て行かなければならなくなるのだらう。

すると、サラが口を開いた。

「ダニー。カイルと私は今、あなたについて話してたのよ。で、もしあなたがいやじゃないならだけど、この家で私たちと過ごす時も、女装してていいって、言いに来たの。あなたがここを借りててくれることは私たちのよろこびだし、それに、私たち、あなたがこの家で、心からくつろいでくれることを望んでるのよ」

ダニエルは、胸がドキドキし、顔を赤らめていた。今自分が聞いたことが信じられなかった。

と、サラがつづけた。

「私たち、明日、あなたをディナーに招待したいとおもってるの。で、今夜着てた、あのすてきな服を着て来てく

れるとうれしいんだけど」

「本気で言ってるんですか？ 僕にあの服を着て来てほしい……って？」

ダニエルは、まるでサラが今、外国語を話したような気がして、そう繰り返した。

「ええ、そういう意味よ」

サラはそう答え、「あなたが、それで幸せな気持ちになるなら、ぜひ」とつづけた。

ダニエルは、うれしさを抑えることができなかった。そのせいで、サラの体を、腕もろともに抱きしめ、彼女にふたたび痛い思いをさせてしまった。ダニエルはあわてて謝り、笑い合った。

そのあと、ダニエルとサラは、2時間にわたって話し込んだ。ダニエルがどんなゴールをめざしているのか、どうやってそこにたどり着こうと思っているのか……などなど。

ダニエルは、まるで楽しく話せる女  
同士の友だちを持ったような気持ちに  
なり、興奮していた。

サラが眠くなってきたらしいのに気  
づくまでその話をつづけ、そこでやっ  
と「おやすみ」と言い合った。

でも、ダニエルは眠ることができな  
かった。この部屋の間借り契約に、新  
しい一章がつけ加わったように感じて  
いたのだ。

\*\*\*

その翌日は、なんだか時間のたつの  
がひどく遅く感じられた。ダニエルは、  
家に帰って新しい関係をつくることが  
待ちきれなかった。

自分の夢の実現は、そんなに遠くない  
ような気がした。もし、ヘイソン夫  
妻が「彼女」を受け入れてくれるなら、

きっと、他の人だって受け入れてくれるにちがいないという気がした。ほんの少しかもしれないけれど、ものごとがうまく運びはじめているように思えた。まだ、越えなければいけない障害は少なくないだろうが、今、そこには希望があるのだ。

仕事が終わりに、ダニエルは出せるだけのスピードで車を飛ばして帰宅した。

準備はあっという間にできた。すでに昨夜から、必要な物をすべて用意してあったし、今日一日、段取りを計画しながら過ごしたからだ。

サラがドアをノックした時には、ヘアの最終的な仕上げも終わっていた。

「わあ、ほんとにすてきよ」

ドアを開けるなり、サラは声をあげた。



「まるで、ファッション雑誌から飛び出したみたい」

ダニエルは顔を赤くしながら、サラに「ありがとう」と言った。

サラはまだ腕を包帯で吊っていたけれど、いつもよりずっとエレガントに着飾っていることは、一目見て気がついた。レースをいっぱい使った白い上着と流れるようなダークブルーのロングスカート。メイクと宝石はちょっとやりすぎという気もするけれど、よく似合っている。

ダニエルはそう感じながら、サラといっしょにダイニングに入っていった。

カイルはすでに、そこで白ワインを注いでいた。グレーのダブルのスーツを着ている。この世代の男にとって最良に見えるその装いを、ダニエルは魅力的だと感じていた。

カイルはテーブルをまわりサラのために椅子を引いた。その紳士的なやり方に、ダニエルは尊敬の念を込めて微笑んだ。と、カイルは、ダニエルのためにも椅子を引いてくれた。ダニエルは、それに胸がときめく思いがした。

テーブルの上は完全に整えられ、おいしそうな料理が並んでいた。サラが、自分でしたにちがいない。

ローストビーフ、いんげん豆のキャセロール、マッシュポテトと自家製パン——まるで宮廷料理じゃないか。

「そんな体で、ここまですることないのに」

ダニエルは思わず口にしていた。

「言ってくれば、喜んで手伝いました」

「そんな心配いらないのよ。料理は私にとって、どんなときだって楽しみなんだから」

サラは、そう答えた。

最初はぽつりぽつりと始まったディナーの会話も、次第に弾んでいった。

話題のほとんどはダニエルのことだった。

ヘンソン夫妻は、ダニエルのすべてを知りたがった。ダニエルはふたりの問いにていねいに答えた。そんなふうに注目されていることのすべてが楽しかった。もう「彼女の生活」を隠して暮らす必要はないのだ。

女として興味を持たれることは、本当にすてきなことだった。こんな感じが永遠に続けばいいのにと、ダニエルは思った。

ディナーが終わった後、居間へと場所を移し、コーヒーを飲んだ。会話はさらに方向を変えた。よりパーソナルな話題——つまりセックスへと。

「ダニエル、君はゲイなのか？」

カイルがきいてきた。

「実際の話、よくわからないんです」

ダニエルは答えていた。

「信じられないでしょうけど、僕……あ、あ、あ、まだ一度もそういう経験がないから」

「つまり、女性とも男性ともってこと？」

サラが驚いたように聞き返した。

「ええ、どっちとも」とダニエルは返事した。

「女の子と、そういう意味でのデートをしたことはないです。なんだか、そんなことするのはまちがってるような気がして。男には……あ、あ、あ、カイル以外には……こんな格好、見せたことないし。だから、そういう機会もなかったってことです」

と、カイルが言った。

「私たちは君に、そんな機会をつくってあげたいと思ってるんだ」

ダニエルは、その言葉にぽかんと口を開けていた。そして、あわててサラに目をやった。

するとサラは、なんだか楽しそうに微笑みながら「私に説明させて」と言い、ダニエルの近くに場所を変えて、その膝の上に手を置いた。

「あのね、カイルと私はずっと、ファンタスティックなセックスライフを送ってきたの。子どもの頃から愛し合ってきたしね。でも、数年前から、私はセックスに喜びを感じられなくなっているの。もちろんカイルのことは愛してるけど、彼といっしょにそれを楽しむことができなくなってるのね。でも、彼はまだ健康だし、体力のある男でしょ。そんな彼の欲求を、私は満たしてあげられない。だから、売春婦を雇う

ことまで考えたの。だけど、そのあと、感情的なもつれが起こりそうな気がして、それが怖わかったの。ちょうどそこへ、あなたが現れた。私たちは、それこそ完璧な答えだって気がしたの」

ダニエルは、耳を疑った。

ふたりは本当に、自分がカイルに抱かれることを望んでいるというのか？

こっちを試しているんじゃないのか？ そんなことを本当に頼んできているのか？

やっとのことでそんな混乱から抜け出し、ダニエルは疑問を口にする事ができた。

「はっきり言ってください。それって、僕……あたしに、カイルと寝てほしいってこと？ あなた自身がそれを望んでるってこと……なの？」

「ええ、まさにそのとおりよ」

サラは、そう答えた。

ダニエルは、カイルの方を見てきいた。

「あなたは、あたし……僕がまだ、肉体的には男だってことに気づくことになるんですよ」

「ああ、わかってるさ」

カイルは言った。

「それこそ、完璧な答えだと思った理由のひとつなんだよ。ことが終わったあと、感情的なごたごたは起こらないだろうと私たちは思ってる。そんな君と関係を持つのは、サラへの愛とは別のものだ。私はずっとリベラルな考えを持ってきたつもりだし、私と君の両方がそんな経験を楽しむことに問題があるとは思っていない」

ダニエルは、どう考えていいかわからなくなっていた。

一方で、サラが永年自分がしてきたように、夫に悦びを与えてあげようと

していることに、尊敬の念さえ抱いていた。また、カイルが自分のことを欲求の対象として見てくれていることは、なんだからうれしいことのように思えた。ダニエルはカイルを魅力的だと感じているし、サラはそれをわかっているような気もした。

もしかしたらこれは、なにかの始まりということなのだろうか？

「ちょっと考える時間をください」

本心をお首にも出さずに、ダニエルはそう言っていた。

本心では、男とセックスしたいと思っていた。ずっと前から夢見ていたのだ。カイルは、そのための、完璧な教師たり得るだろう。

ダニエルは、カイルがすぐに自分を連れて行くことを望んでいたが、心の中のなにかが、そう言うのをためらわせたのだ。



「もちろん、そうだろう」

カイルはそう返事してきた。

「たとえば君がどんな答えを出そうと、私たちが君を喜んで受け入れることに変わりはないからね」

ダニエルはそれに微笑み返し、席を立った。

「そろそろ寝に行きますね。すてきな夜でした」

ヘンソン夫妻は、おやすみを言うと、階段を上がっていった。ダニエルもまた、自分の部屋へと向かった。

なにを恐れることがあるのだろうか？

カイルと関係を持つことのどこに問題があるというのだろうか？

愛し合う二人が、何千回とそうしてきたように、ベッドルームに入っていく足音を聞きながらダニエルは思った。

おそらくこれは、二人が、幸せに理

解し合える関係を保つために必要なことなのだ。

ダニエルは心を決めていた。

二人の望むとおりにしよう。明日の朝、サラにそう言おう。

\*\*\*

ダニエルは、鏡の中のその姿が気に入った。

消防車のように赤いPVCビニールのボディシェープコルセットだ。それは、彼女のウエストを細くくびれさせ、そして、胸を押し上げ、小さいけれどもはっきりしたふくらみをつくっていた。この衣裳を着ている間は、あのみじめなブレストフォームを着ける必要もないのだ。

そのコルセットは、背中に連なるボタンが股の間にまわりこみ、その最後

のひとつが、ちょうど前側のボトムの位置に着いていた。これは、不快な感じになる寸前まで、服の締め付けを調整するためのものだ。ダニエルは、自分の生殖器を体内に押し込み、最もきついポジションでそれをとめた。

ダニエルは、この服と同じように赤い6インチの細いヒールの靴を買ってきていた。

その次に包みから出てきたのは、いちばん薄いタイプの黒のストッキングで、つま先とヒールの部分が濃くなって補強されている。その片一方を手にとると、ダニエルは、何年も前に母がそうしていたのを見ていたように、それをくるくると丸めていった。そして、赤くペディキュアを塗った足先をそこに入れると、かかとの補強部分がきれいにそこを包むようにして伸ばし、さらに、長い脚の上を、ゆっくりと用心

深く、尻の丸みのすぐ下のところまで滑らせた。

コルセットから下がる細いセクジューなレザーストラップに、そのナイロンストッキングのふちを固定する。二本目のストッキングも同様に、でもさっきより慣れた手つきで履いた。

ナイロンに包まれたその足を赤いパンブスに入れると、摩擦のなくなったストッキングの肌は、滑るように入っていた。

そそり立つヒールに足を慣らしたあと、姿見の前に立ち、そのすらりとした脚に満足した。

ダニエルは、本来なら貯めておかなければならないお金まで、この衣裳の費用として使っていた。でも、その着心地と姿は、じゅうぶんにその出費に見合っているように思えた。

今日は、いつもより濃い目にメイク

した。

カイルになんの迷いも持たせず、その気にさせたいと思ったからだ。

必要以上にヘアスプレーを使った気もしたが、そのおかげで、ワンレンの髪を顔にかからず垂らすことができた。2インチのフープイヤリングと真っ赤なマニキュアが、彼女のアンサンブルを完全なものにした。

サラがドアをノックした時、ダニエルはまだ鏡に見入っていた。そのせいで、まるでいたずらを見とがめられたように、ドキリとした。

ドアを開けると、サラはいつもと同じように微笑んでいた。

「まあ、なんて魅惑的なもの」

さらは驚いたように言った。

「準備オーケーね？」

「ええ……」

ダニエルは、ちよっとうろたえなが

ら答えた。

「あなたは、ほんとに、これで……いいのね？」

「もちろんよ。私にとって、これ以上のことはないのよ」

サラは安心させるように言った。

ダニエルはゆっくりと階段を上がっていった。もはや、後戻りはできなかった。そのヒールは、まるでダニエルを急かしているようでさえあった。

ドアを軽くノックした時には、返事がなければいいがと思った。

ドアが開くと、そこに、バスローブ姿のカイルが立っていた。ダニエルを前にして、その目が大きく見開かれた。カイルはかけるべき言葉が見つからずに戸惑っているように見えた。

「入っても、いい……かしら？」

ダニエルは、その沈黙を破って言っ

た。

「ああ、もちろん」

カイルはそうつぶやき、「君が、あんまりすてきすぎるから……」とつぶけた。

「ありがとう。あなたも、とってもすてきよ」

ダニエルは、ナーバスになりながらそう答えた。

そこで二人は動きを止め、なにをすべきか迷うように見つめ合った。でも、その静寂は、それぞれの口から漏れた小さな笑い声で断ち切られた。そして、カイルは、ダニエルの体に腕を回し、唇にそっとキスしてきた。

ダニエルは、親愛の情を込めてそれに応え、その指をカイルの胸毛の間に這わせた。

カイルは、片方の手をダニエルの頭に移動し、顔をさらに押しつけるよう

にしてきた。それは、ダニエルの口を開かせ、カイルの舌が入ってくるの許すことになった。ダニエルは、口の中でカイルの舌が動くのに悦びを感じ、もっとしてほしいと思った。

カイルは、無理強いする感じではなく、ダニエルをベッドの上に導いた。しかし間もなく、カイルはその体の上ののり、ダニエルの動きを完全に支配下に置いてしまった。

ダニエル自身は、そんなふうに支配されることに夢中になっていた。されるままになることは、大きな悦びだった。彼が望むどんなことでも受け入れたいと感じていた。

カイルは、舌で、そして手で、ダニエルの体をまさぐりつづけていた。肌の上を這うその感触は、ダニエルの正気を奪っていった。

ダニエルはそれを辞めてほしくない



と思っているばかりでなく、もっと激しくしてほしいと感じていた。

と、カイルはその左手を下に伸ばし、ダニエルの張りつめた部分を抑えていたコルセットのボタンをはずした。

でも、それは、ダニエルを少しも不安にすることはなかった。カイルが、ダニエルを自分のものにしたいと思っているのがよくわかったからだ。

ダニエルは、これから起こることを、もう恐れていなかった。それどころか、早くそれが起こってほしいとさえ感じていた。

と、カイルは起きあがって立て膝になり、ダニエルの体を向こう向きにした。

そして、いまや垂直に立ち上がったその男性自身を明らかにするように、ローブを脱いだ。

カイルはそこにコンドームをつけ、

潤滑ゼリーのチューブのふたを開けた。

次にダニエルの隣に身を横たえると、後ろのあの部分に手を触れた。

ダニエルは、ぴくりと体を震わせた。するとカイルが「だいじょうぶだよ。こんなかわいい子に、痛い思いはさせないつもりだから」と安心させてくれた。

カイルはダニエルの首の後ろに唇を這わせながら、ダニエルの中に指を1本入れてきた。

最初、そこは、きつくしまっていたが、次第にリラックスしていった。体の中に感じる指の動きのおかげだった。それは、これまでダニエルが感じたどんなことよりも刺激的だった。

ダニエルは、この瞬間を楽しんでいた。その指のリズムに合わせて、ヒップが律動しだしていた。

その時、カイルが2本目の指を入れてきたので、ダニエルはその感覚に思わずうめいた。カイルの指は、まさにその場所を探り当て、強く、でも優しくこすってきた。ダニエルの前のもものが固くなって揺れた。

ダニエルは、興奮と予感にあえいでいた。

カイルは、今度はダニエルの後ろにまわるような形で立て膝した。そして、両手でダニエルの腰をつかむと、引き寄せた。

カイルは、入れて来る前に、ダニエルのものにさらに潤滑ゼリーを塗りつけた。でも、今度は、指2本分とは比べものにならないだろう。

固いものが、悦びの目的地を探して、ダニエルのバラのつぼみに触れた。

ダニエルにためらいはなかった。悦びとともに彼を受け入れていた。痛み

に体を震わせ、うめき声を上げたが、そのことでカイルがやめないでほしいと願った。

カイルはやめるようなことなく、もっと深く入り込んできた。そして、その長くて固いコックを、ゆっくりと前後に動かしはじめた。

ダニエルは、両方の内腿がベッドにぴったりくっつくほど、両脚を開いていた。

ダニエルを突くカイルの動きが、次第に強く、そして速くなっていった。

二人は、今や、同じリズムの中でひとつになっていた。

「ダニエル、すごくいいよ。よくしまる」

カイルが、ダニエルの耳元でささやいた。

「……君のせいで、もうイキそうだよ」  
それは、今、ダニエルが待っていた

言葉そのものだった。ダニエルは、彼より先にクライマックスに達しようとしていたからだ。

ダニエルが頂点に達したのとまさに同時に、カイルはダニエルのいちばん深い部分に突き進み、熱いものを放出した。

「あ～～～。いい～」

ダニエルは大きな声をあげていた。

カイルは、何年間も我慢を強いられてきた男のように、ダニエルを満たしつづけた。

二人は同時に大きく息をつき、そのあと、呼吸を整えるようにしていた。

カイルは、コンドームの先をつまみ、まだ固い自分のものから抜き取った。彼は、そのコンドームを処分するとベッドのへりに腰掛けた。

ダニエルは、カイルがもう一度そばに来てくれるのを期待しながら、体の

下にあった枕を抱きしめていた。

でも、カイルはそうしてくれず、そのかわり、ダニエルは彼が泣いているらしいことに気づいた。

ダニエルは、体を起こし、その手をカイルの肩にかけた。

「どうしたの？ あたし、あなたを喜ばせてあげられなかったの？」

ダニエルは、そうきいた。

「とんでもない。すごくよかったよ」

カイルはダニエルを安心させるようにそう言ってから、つぶけた。

「起きあがったところで、そこに置いてある写真が目に入ったんだ」

その言葉に、ダニエルは、サイドテーブルの上を見た。そこにあったのは、カイルとサラの40回目の結婚記念日の時の写真だった。

「私は、彼女を裏切ってしまった」

カイルは、強い口調でそう言った。

ダニエルは、それにどう答えていいかわからなかった。

それでも、カイルの背中に身を寄せ、言葉をかけた。

「そんなことない。サラは、あなたのことを心から愛してるのよ」

でも、それがなんの慰めにもなっていないのは明らかだった。

それで、ダニエルは、服を整え、部屋を出た。

そして、階段を下りる途中でサラと出会うことになった。

「どう、うまくいった？ 問題はなかった？」

サラがきいてきた。

「今、カイルに必要なのは、あなただと思う。すぐに行ってあげて」

ダニエルはそう答えていた。

ダニエルが自分の部屋に走り去ると同時に、サラは階段を駆け上がった。

ダニエルは自問自答していた。

こんなことして、よかったんだらうか？

40年もの夫婦生活をぶち壊してしまっただけじゃないのか？

カイルはまた、自分のことを受け入れてくれるだらうか？

サラと、これまでどおりつき合っていけるだらうか？

さっきまで至高の幸せを味わっていたというのに、今、ダニエルの精神状態は、底の底まで落ち込んでいた。

ベッドに身を横たえ、ダニエルは、すすり泣きながら眠りについた。

翌朝、仕事に行こうと庭を歩いていると、サラが家から出てきて、早足で近づいてきた。

「まずいな」

ダニエルは、顔を合わせたくなかつ



た。

しかしけっきょく、気づかないふりをして車のドアを開けたところで、追いつかれてしまった。

ナイトガウンを着たままのサラは、その顔に満面の笑みをたたえていた。

「出掛ける前に、お礼を言っておきたかったの。ゆうべは、ほんとにすてきだったのよ」

サラはそう言った。

ダニエルが混乱の表情を向けると、サラがつづけた。

「ゆうべ、あなたが去ったあと、カイルと私は、ずっと抱き合って話したの。信じられないくらいとびきりの時間だったわ。私たち、ここ何年も、そんなふうに話したことなかったから」

その言葉に、ダニエルは気持ち浮き立ってくるのを感じ、サラを抱きしめていた。

と、サラが小声でつぶやいた。  
「もしよかったら、昨日みたいなこと、  
また、してくれる？」

\*\*\*

それからの数カ月間は、ダニエルにとって、よろこびに満ちた日々だった。

ダニエルとカイルはお互い、日々、うち解けていった。

カイルは、ダニエルにとって理想の恋人と言ってよかった。ダニエルがしてほしいことを、いつもしてくれるのだ。

ダニエルもまた、カイルに不満を抱かせるようなことはなかった。

週2回から3回、彼らは愛し合っていた。次々に、いろいろな体位ややり方を試したりもした。

ダニエルは、男に満足を与えること

で感じる女の喜びがわかるようになっていった。

ダニエルは一方で、サラともより心を許しあえる関係を築き上げていった。それは、母と娘というような関係だった。

サラには子どもがなかったので、ダニエルを育てるという感じがかわいがり、女性として知っておかなければならないことを、あれこれ教えてくれるようになった。それはメイクの方法に始まり、すべてのことにおよんだ。

ダニエルとサラは、ますますいっしょに過ごすようになっていった。

当然すぐに、サラは、どこかへ出掛けるような時、ダニエルを誘うようになっていった。ショッピングモールやフリーマーケット、そして町へ昼食に出掛けるようなことがふつうになっていった。

そしてついにサラは、ダニエルにいっしょに美容院に行くことを納得させたのだった。

その男性美容師に身をゆだねている間、ダニエルは言い表せないような喜びを感じていた。髪がシャンプーされ、とかされている時には、夢心地になっていた。強い力で頭皮をマッサージする美容師の手は、ダニエルを天国に連れて行ってくれた。その美容師が完璧なカットをしてくれている間に、他の二人がマニキュアとペディキュアをしてくれた。

その時のためにダニエル自身が伸ばしていた自前の長い爪は、今やハリウッドスターたちのように輝いていた。

ダニエルは、シンプルで手入れが簡単な髪型にしてくれと頼んでいた。そのリクエストは、ダニエルの顔をパーフェクトに引き立てるレイヤードカッ

トによって叶えられた。

腕を組んでその店をあとにしたダニエルとサラは、その日の残りの時間を、女らしくくすくすと笑いと微笑みの中で送った。

もう後戻りできないことを、ダニエルは知っていた。人生の残りの時間、こうして生きていく以外、もはや道はないのだ。

ダニエルの変身は、職場で気づかれないわけにはいかなかった。

すぐに、その新しい髪型とすてきな爪についての噂が広まっていった。

でも、それがなんだというのだろうか？

ダニエルは髪型を強制される気はなかったし、誰にもその爪について文句を言わせるつもりもなかった。職場でもそんな自分を押し通し、そして帰宅

するとすぐに女装するという生活をつづけていた。

しかし、やがて、そんなダニエルの世界をひっくり返してしまうような時が、やって来た。

サラといっしょに買い物を楽しんで帰宅した、ある土曜日の夜だった。

二人が戻った時、一日中庭仕事をしていたというカイルは、ちょうどシャワーを浴び終わったところだった。

「二人とも、誰かさんのために買ったものを、店に忘れてきたのかい？」

カイルが、そうからかった。

「あら、そうみたいね」

サラがそれに反撃した。

「でも、心配しないで。明日また買い物に行くつもりだから、その時とってくるわ」

腐った顔でたたずむカイルを見て、

ダニエルとサラは吹き出した。

「私たちの服を見て、なにも感じないの？」

ダニエルは、カイルにそうきいた。二人がお揃いの服を着ていることを気づいていないようだったからだ。

ダニエルとサラは並んでみせた。二人とも、白いブラウスとデニムのロングスカートをはいていた。

「今日、二人で見つけたのよ」

サラがそうつけ加えた。

口には出さなかったけれど、カイルはじつは気づいていた。二人がどれほど似ているかに。ダニエルは、ほとんど、サラのヤングバージョンなのだった。

「二人とも、すごくかわいいよ」

カイルは、ちょっとはにかみながら言った。

「あなたがそう思ってるのは、あたし

たちにもよくわかるわ」

ダニエルはそうからかいながら、サラと顔を見合わせて笑った。カイルのズボンの前が大きくふくらんでいるのに気づいたからだ。

「どうやら、私が夕食の準備をしている間、二人で二階に行った方がいいみたいね」

サラがそんな提案をしてきた。

ダニエルは、思わず笑い出して聞き返した。

「本気？ 私、料理を手伝うつもりだったのに」

「さっさと行きなさい」

サラはさらに強くそう言った。

「ちょっとの間でも二人で過ごしたいと思ってるの、見え見えよ」

それでダニエルは、カイルの手を取り、二階に上がった。

ベッドルームに入り、ドアを閉める



と、ダニエルはカイルのベルトに手をかけ、ズボンを脱がせはじめた。

「えっ、そんなこと、してくれるのかい！」

カイルは、驚いたような声をまじえて言った。

「私が無理してるとでも思ってる？」

ダニエルはそう言い返した。

「今ではあたし、いちばん愛する二人のために、私の時間を使いたいとだけ思ってるのよ」

ダニエルは、カイルのズボンをおろすとベッドに座らせた。ベッドの端に腰掛けたカイルのコックが、その予感で立ち上がってきた。

ダニエルには、カイルがどうしてほしいのかがよくわかっていた。

カイルの前にひざまずき、その男性自身のつけ根のところを握る。

そっとキスし、舌の先を這わせる。

カイルが頭の後ろに手をかけてきたのにあわせて、ダニエルは唇でその先を包んでいった。カイルがブロンドの髪の中に指を入れてきたので、ダニエルの体の中にしびれのようなものが走った。

ダニエルがそのベニスをゆっくりとストロークすると、カイルはそれをダニエルの口の中に押しつけてきた。

今やカイルのものは、じゅうぶんに固くなり、準備はすべて完了しているようだった。ダニエルは、大きくなりきったコックから手を離し、カイルのものが深く入りすぎてのどをつまらされたりしないように、両腕をカイルの腰の上に置いた。

カイルの方は、ダニエルの頭から手を離し、その手を自分の体の後ろにまわした。腰を浮かせ、それをダニエルの口に出し入れするのに、体を支える

ためだ。

目を閉じたダニエルは、まるでそれが使命でもあるかのようにカイルに奉仕しつづけた。今や、全身全霊でそのことに没頭し、カイルの熱いスペルマをのどの奥で感じる瞬間を待ち望んだ。

ダニエルは永遠とも思える時間それをつづけ、ついに、カイルはそんな喜びを与えてくれた。

ダニエルは体を起こし、顔についたカイルの残留物をぬぐい取った。

見ると、カイルは、ベッドの上に仰向けに寝ていた。

「あたし、なんだか、ぜんぶ吸い取っちゃったみたいね」

ダニエルは、いたずらっぽく言った。

ところが、カイルは、なにも返事しない。ベッドの上に、ぴくりともせずに横たわっていた。

「カイル」

立ち上がったのぞき込むようにして、ダニエルは呼びかけた。

「カイル、どうかしたの？」

その声におびえが混じった。

「カイル」

ダニエルは、カイルの返事を聞きたくて、大声で言い、その体を揺り動かした。

「サラ、サラ」

ダニエルは、叫びながら階下に走っていた。

「カイルの様子がおかしいの」

ダニエルが電話の受話器を取り上げた時には、サラは、できるかぎりの速さで階段を駆け上がっていった。

ダニエルは恐れに震える手で、急いで911にダイヤルした。

「911です。なにか急病ですか？」

オペレーターが聞いてきた。

「65歳になる男性が、心臓発作になったようなんです」

「住所をおっしゃってください」

「ローレン通345です。急いで。あの人を死なせないで」

ダニエルは懇願していた。

「救急隊員が、もうそちらに向かっていますよ。あなたは、CPR(心肺蘇生術)の心得はありますか？」

冷静を心がけた声で、オペレーターは言葉を返してきた。

「いえ」

ダニエルはそう告げながら、自分の無力さを感じていた。

あたしになにができるの？ あたしはどうすればいいの？

オペレーターは、呼吸をチェックし、衣服を緩め、何度も呼びかけてみるように指示して電話を切った。でも、ど

れも、なんの役にも立たないようだった。

電話から8分もしないうちに、救急隊員が到着した。彼らは2階に駆け上がり、カイルの手当をはじめた。

ダニエルとサラは部屋のすみで支え合い、わけもわからず泣き叫んでいるしかできなかつた。

救急隊員たちはCPRをくり返し、電気ショックを試み、それからアドレナリンを試した。そして最後に、地域の総合病院に搬送することに決めた。

ダニエルとサラには、それに従うことしかできなかつた。

若い東アジア人の医者が救急治療室から出てきた。

「ミセス・ヘンソンですか？」と彼は訪ねた。

「ええ」

最悪の事態を恐れるようにサラが言った。

「ご主人は、心筋梗塞でした。われわれは、できるかぎりの手を尽くしたのですが……」

倒れかかるサラをダニエルは抱きかかえた。

今すべてを失った女性のために、他になにがしてあげられるというのだろう。

\*\*\*

サラは、葬儀の席で、ダニエルに隣に並んでいてくれと言った。

多くの参列者たちが、ダニエルのことを二人の娘なのかと問いかけてきた。

サラは、ダニエルがそばにいてくれることで、安心できるようだった。で

も、二人は、もうすぐ別れて暮らさなければならなくなるのだ。

家は、なんの問題もなく売れた。シミひとつないほど手入れされた2階建ての家は、まさにお買い得物件だったのだ。競売に参加した買い手たちは、競って値をつり上げ、最終的にはサラが気に入った若いカップルが競り落とした。

カイルが亡くなった今、サラは、これ以上ここに住んでいる気にならなかったようだ。妹の住むフロリダに引っ越すことに決めていた。

ダニエルが自分の荷物をサターンに積み終わった時、これで最後となるその家から、サラが歩いて出てきた。

すぐに思い出になってしまおうと思うと、ダニエルにはそちらを振り向くことができなかった。



ダニエルは、これからの人生がどうなるのか、それを恐れていたが、そんな素振りサラに見せまいと強く思っていた。

「ほんとに、空港まで送って行かなくていいの？」

ダニエルはサラにきいた。

「ええ、その方がいいと思うの」

サラはそう答えた。

「これを受け取って。でも、私が行くまで開けちゃだめよ」

言いながら、サラは、ダニエルにマニラ紙の封筒を手渡した。

「わかったわ。これから、ちゃんと暮らしていけそう？」

ダニエルがきくと、サラは安心させるように言った。

「ええ、だいじょぶよ。家を売ったのとカイルの保険で、私にとってはじゅうぶんなお金が残ったわ」

サラはダニエルの体に腕をまわし、きつく抱いた。

「いつか、フロリダまで訪ねてきてね」

「もちろん、行くわ」

ダニエルは、必死に悲しみを抑えながら言った。

それからサラはタクシーを拾い、乗り込むと、走り去っていった。

ダニエルは、自分の車の運転席に座り、考え込んだ。そして、男としての人生に戻ることを覚悟した。

これまで送ってきたような暮らしは、もうできない。ここでの暮らしはもう終わったのだ。残りの人生で、いったいどれだけのことができるというのだ。

そう思いながら、ダニエルが例の封筒を開けると、そこから一枚の写真が出てきた。

それは、カイルとサラの40回目の結

婚記念日の写真だった。

あふれてくる涙の中で、ダニエルは、その封筒にメモが入っているのに気がついた。開くと、そこにはこうあった

---

親愛なるダニエル

カイルと私は、あなたが、そうなりたいと思っているような人になることを望んでいます。

どうか、お体に気をつけて。そして、私たちのことを忘れないでね。

いつまでも愛をこめて サラ

メモの中には、25万ドルの小切手が挟まれていた。

CopyRight(C)2002 by Jillian O and Deborah Edwards

Based on the text FictionMania

Translated by Rino Maebashi

この「ターニング・ポイント」は、ジリアン・Oさんと  
デボラ・エドワーズさんのオンライン小説

“Turning Point”を、前橋梨乃が翻訳したものです。  
原作著作権はジリアン・Oさんとデボラ・エドワーズさ  
んが、翻訳著作権は前橋が保持します。個人で楽しむ以  
外、無断でのコピーを禁止します。